

「本講」から「第09講」まで、「品詞」の拡大、すなわち、「句」「節（『文。』の転換）」を学習します

第06講 「前置詞」なんて空疎な呼称はやめて、『成句詞』+「後属役名語句」=「形容句か副句』でいくべし！

（「前置」って何の前に置くの、「名詞」っていうわけ、で、だから何が起こるの・・・）
本書では、「前置詞」という形式的で空疎な品詞名をやめて、「形容句」または「副句」をつくるという実質的役割に着目してあらたに命名し、「成句詞」とよびます

いよいよ、「単語」のレベルを離脱して、「複数の単語による意味のあるまとまり（語集団）」すなわち「句」「節」のレベルに入って、「品詞」が拡大していきます
英語の「構造」がどんどんわかってきて、楽しくなりますよ（「複雑高度化の実感！」）

本講では、「句」についてみていきます（「名句」は「第04講」参照）

「句」ってなんですか・・・、からはじめましょう

表現を拡張させるために、ふたつ以上の単語を連携させて、「1単語」ではあらわせない複雑高度な意味を、単語の集団で新たに作り上げていくのが「句」です

「句」は、ほとんどが「成句詞（前置詞）」によってつくられます

「成句詞」による「句」は、「意味のあるまとまり」として、「形容詞」か「副詞」としてしか働きません（「名句」の代用の場合もありますが、稀有です）

「句」による「形容詞」「副詞」ですから、「形容句」「副句」と呼びます

ある「状態」「状況」が1語の「形容語」「副語」であらわせないような場合は、「成句詞」を使って、複数の単語を連携させて、新たな「形容詞」「副詞」をつくっていくのです

例えば、「今夜に」は「tonight」の1語の単語がありますが、「朝に」は1語の単語がなく「in the morning」の3単語による「句」であらわし、「成句詞」が必要なのです

また、使い慣らされているせいか、「成句詞」が消えてしまっているものもあります
例えば、「every day」「last year」などがそうです

このような場合は、一見、ただの「名句」に見えてしまうので、注意が必要です

成句詞

成句語（前置詞）

成句句（群成句詞）（群前置詞）

複数の単語が集合して、一語の「成句詞」として働いている場合もあります（群成句詞）

「後属役」「後属語」「後属句」とは

「成句詞」が「支配」している「名詞」を一般には「目的語」といいますが、「他動詞」の「目的語」と「同名」で、両者の呼称が同じなのは紛らわしく、別の呼称が望ましいので、「後属役」「後属語」「後属句」とでも別に「命名」するのが合理的だと思います（「属」の字に注意、「成句詞」の「後ろ」で「従属」しているのです）

「形容句」「副句」でも、その働きは1単語の「形容語」「副語」と同じです

「成句詞」＋「後属役名詞」	「形容句」	「名語修飾」をする
		「補役」になる
	「副句」	「副詞三原則」が該当

① The girl in our class is very pretty.

中心主語	形容句	後属語	自	形補
主		役		

② The girl plays soccer in that park.

副句・場所	後属語
-------	-----

①は「名詞修飾形容句」で、②は「副句」の例ですが、「形容句」か「副句」か曖昧で、どちらとも解釈できる場合もあります

次の『文。』は要注意です

③ The girl is in good condition.

形容句の補役

この場合、「in good condition」を「よい状態の（場所に）」、「いる（is）」と状況的にとらえるよりは、「よい状態」「である」と、「状態・性質」をあらわす「形容句の補役・補句」と考えたほうが自然でしょう

（「1単語」の場合は「補語」で、「句」の場合は「補句」で、両者をあわせて「補役」と総称します）

このように、「形容句」が「補役」として働く場合もあるので、注意してください

The cherry trees are in full bloom .
この英文を実感できますでしょうか

《「成句詞」＋・・・＋「後属語（句）」》

「成句詞」を見つけたら、確実に「後属語（句）⇒名語（句）」を抑えてください
「成句詞」と「後属語」の間には、多くの「後属語を修飾する形容詞」やその「形容詞」を修飾する「副語」がある場合が多いです

それらの、「役外族」に惑わされずに、「後属語」を認識してください

「成句詞」には「○」を付け、「後属語」には「 」を付けたりするとよいでしょう（くれぐれも・・・「後属語（句）」は「名語（句）」です）

《「成句詞」＋・・・「副詞」「形容詞」・・・＋「後属語」＋「形容句・形容節」》

さらに、「後属語」の後ろには、その「後属語」を修飾する次なる「形容句」や「形容節」がくっついていたりします（「形容節」は後述します）

これらの、「形容句」「形容節」は「後属語」に吸収され・消滅する運命で、「後属語」とは一体ですから、《「成句詞」＋・・・＋「後属語」＋「形容句・形容節」》で、どこまでが「成句詞」に支配された「まとまり」なのかを確実に認識してください

「with a deeply mysterious girl whom I met at the snow festival」
という例句をあげておきますが、習得は「基礎的英文読解」時で十分です

「前置詞」は、その性質からして、「成句詞」と命名されるべきものだということがおわかりいただけたでしょうか

そして、「look at ～」のような「自」＋「副句」を「熟語」というのはもうやめましょう

補足です

「群成句詞」（「群前置詞」）

厳密に言えば、「成句詞」というものに関しては、通常は1語のものを前提視しているのが一般で、その点で、「成句語」というべきでしょう

しかし、たまたま一語の「成句語」が無かったり、1語の「成句語」では示せない（複雑高度な内容を表したい）場合等は、数語で1語の「成句詞」と同様の役割を果たさせます（論理的には「成句句」ですが、「群成句詞」ともよびます）

例えば、「in front of」です

これ以上品詞分解をしても効用はないので、1語の「成句詞」のように扱うのです
その他には、「out of」「because of」「up to」「thanks to」「as to」「by means of」「in spite of」等が有名です
これらは、一語の「成句詞」のようなつもりで覚えてしまうのが得策です

次講以降では、「句」を越えて、『文。』をまるごと、「名詞」化・「副詞」化・「形容詞」化してしまう様子を見ていきましょう・・・すなわち、「節」の学習です

(以下は、「ここで理解できたらホンモノ」という、「文法マニア」向けの記述です)・・・通常一般人は、回避してください
さらに、発展的補足です(今は読み流し、「第12講」終了後に戻ってきてください)
以下に示す、「o f 形容句の構造的由来」は、今の段階では少し難しいかもしれませんが、本書は「理解可能な順での理解の積み上げ方式での講義形態」をとっていますので、「第12講」あたりまで終了したら戻ってきて再読すれば容易に理解できるはずです(関連性から「句」をテーマにした本講で補足しましたが、本補足の完全理解のためには「第12講」までの理解が必要かと思われますことをご承知おきください)

「o f 形容句」の「構造的由来」

『 B o f A 』という形態の場合、

、
「o f A」は「形容句」で「修飾句」であり、「B」は「被修飾語句」です

「A」も「B」も「名語句」しかありません

「名語句」は「主語句(主役)」「目的語句(目的役)」「補語句(補役)」「後属語句(後属役)」にしかありません(「主役」「目的役」「補役」については、「第09講参照」)

ここで、『 B o f A 』という形態には、「元の『文。』」というものがあり、その「名詞化」であると考え、A」には、「主役由来」「目的役由来」「補役由来」の三種があるので

特に、「補役由来」は「同格」と考えられます(「第07講」「第12講」参照)

ここで、辞書を引いて、「主格のo f」「目的格のo f」を丹念に検討し、≪「品詞」の転換(派生語)による『文。』の名詞化≫を認識・理解してください

以上の考え方は、「名詞構文」といわれているものの基本思考です

「名詞構文」という項目(講目)は、難しいイメージでぶち上げられ、一部では儲けのネタになっているようですが、ごくごく簡単なものです

「名詞構文」といわれているものの本質は、「『文。』の名詞化」(「第07講」「第09講」や「第12～14講」参照)のひとつであり、「『文。』の名詞化」という大きな視点のもとで、①「『文。』まるごとの名詞化(「第07講」参照)」②「不定詞による『文。』の名詞化(「第11講」参照)」③「分詞による『文。』の名詞化(「第12講」参照)」に続く、④「品詞の転換(派生語)を伴う『文。』の名詞化」に過ぎないので

(ですから、「第12講」が終了した段階で、本補足に戻ってくれば、容易に理解が深化します)

第07講 「成節詞」が「名節」「副節」をつくる

言いあらわしたい「もの・こと」「状態」「状況」が、どんどん複雑高度になるにつれて、「1単語」だけの世界では、あらわすことが困難になってきます

まずは、「成句詞」を利用した「句」というレベルに、さらには、『文。』まるごとを「名詞化」「副詞化」「形容詞化」してしまおうという「節」のレベルにたどり着くのです

「今、山で、桜を見ているの。」「春の光がいっぱいです。」「桜はどんどん散っていきます。」「でも、どうしてこんなのどかな陽のもと落ち着いた心もなくあわただしく桜が散るのか寂しくなりました。」というのは、「詩」的ではありますが、一般の「説明文」としては幼すぎます

幼児のように、思いつくまま、『文。』を吐き出せばいいというものではありません

「春の光がふりそそぐ今、山であわただしく桜が散り行くのを見ながら、のどかな陽のなかにもかかわらず、落ち着いた心もなく散り急ぐ桜に私は寂しさを感じた。」とでもなるのでしょうか

一般では、「数『文。』」であらわされた同内容を「1『文。』」であらわすことが通常なのです（このような処理技術として必要なのが、「節」です）

このように、思考・伝達の高度化に伴い、一般の「説明文（評論文・論説文）」では、不明瞭にならない程度に、多くの『文。』を「1『文。』」に凝縮しようとするのです
そこでは、『文。』の「名詞化」、『文。』の「副詞化」、『文。』の「形容詞化」という「テクニック（技術・方策）」が使われるのです（『文。』の「形容詞化」は、「形容節詞」を使う特別な技術・方策なので、別に「第22・23講」で説明します）

『文。』が「名形副化」されてしまうと『文。』ではないので、「節」といいます

本講では、「成節詞」という特殊な「品詞」による《『文。』の「名詞化」「副詞化」》を見ていきますが、ここでは、「成節詞（従属接続詞）」という「構成要素」外の「手段的」な「品詞」が「節」をつくるという重要な働きをしていることに注目してください（「形容節詞」も大きな「形容詞」をつくる「構成要素外的手段的な品詞」です）

複雑な『文。』は、「名節詞」「副節詞」「構成来形容節詞（関係代名詞）」「役外来形容節詞（関係副詞）」をたよりに、解きほぐせばよいのです（それぞれ順次説明します）
では、本講で、以下、《『文。』の「名詞化」「副詞化」》を順次見ていきましょう

『文。』を「名詞化」「副詞化」ということは、「構成要素としての主目補」や「役外状況族」として働かせることであって、もう『文。』ではありません

「元『文。』」であって、『文。』とは呼べず、「節」と呼ぶのです

それぞれ、「名節」「副節」と呼びます

本書でいう「成節詞」は、従来「従属接続詞」といわれています
「従属接続詞」とは空疎な命名ですが、仮に「従属接続詞」という場合は、そのフルネームが重要であり、単に「接続詞」ということは許されません
というのは、「接続詞」には、「等位接続詞」と「従属接続詞」があって、それらは全く別の働きをするので、きちんと分けなければならないからなのです
しかし、本書では、両者を命名から分け、「従属接続詞」を「成節詞」と呼びます

本論からそれますが、まずは、「等位接続詞」を見てみましょう

(本書では、しばしば、「等接」と略します)

「等位接続詞」は、《「語」と「語」》、《「句」と「句」》、《「節」と「節」》、
《「『文。』」と「『文。』」》を同等に連結させます

「and」「but」「or」が代表です

「and」で、いくつか見ておきましょう

Yuki and Tomo are cousins.

「単語と単語」

They write songs in the morning and in the evening.

「句と句」

She knows that they love songs and that they want to be singers.

「節と節」

They studies music and Nari teaches them it.

「文と文」

とにかく、「等位接続詞」と「成節詞（従属接続詞）」はきっちり分けてください
「等位接続詞」は「接続詞」といってもいいでしょうが、「成節詞（従属接続詞）」は「接続詞」というよりは、《「『文。』」を「名詞化」「副詞化」する「手段的」な「品詞」》ですから、巨視的には「転換詞」とでも「命名」すべきようなものです
また、「接続詞」という名称から、「国語」の授業や試験でいう「接続詞」と一緒にしないでください

「国語」でいう「接続詞」は、「段落と段落」や「『文。』」と「『文。』」との文脈的流れを滑らかにする「副詞」的な「接続語」と呼ばれるべきものであって、「英語」の「等位接続詞」や「成節詞（従属接続詞）」とは、全く違ったものとみるべきです

では、本論の「成節詞」に入ります

（本書では、ほとんど「従属接続詞」という語を使いませんが、使う場合「従接」と略することがあります）
（「名節」や「副節」に対して、本体の『文。』を「主節」といい、「名節」「副節」を「従属節」といって、本書では「従節」と略しますので、「従接」と「従節」の使い分けに注意してください）

「成節詞」は、『文。』を「名詞化」「副詞化」する一種の「装置」のようなもので、「成節詞」は、『文。』が「名詞化」「副詞化」されている場合の「目印」なのです

成 節 詞	
名節詞	t h a t 節・w h e t h e r 節・i f 節・w h 節
副節詞	w h e n 節・b e c a u s e 節・i f 節・t h a t 節・・・等

「名節」をつくる「成節詞」を「名節詞」とよび、「副節」をつくる「成節詞」を「副節詞」とよびます

「名詞」の働きをする「名節」をつくる「名節詞」は上記の「4種」しかありません（「w h 節」については、講を改めて、第08講で学習します）

「副詞」の働きをする「副節」をつくっている「副節詞」は、「副詞3原則」の「Ⅱ意味」の数以上に多数ありますので、講の末に、別表にまとめておきますが、今すぐに完全に覚えようとしないでください（こんなのがあるのかという程度で十分で、順次、ゆっくり覚えてください）

「成節詞」は、『文。』をまるごと「名詞化」「副詞化」するわけですから、
《「成節詞」＋「完全な『文。』」》となります
「形容節詞（関係代名詞・関係副詞）」との関係で、《「成節詞」＋「完全な『文。』」》という視点は重要なものですから、しっかり認識してください

では、具体的に「名節」「副節」を見ていきますが、まずは「名節」です
日本語では、『文。』に「～ということ」という「成節詞の t h a t 」にあたるものをつけるだけで、『文。』がまるごと「名詞化」してしまいます
こんなことを再認識しつつ、「名節」をみていきましょう

「名節」をつくる「成節詞」である「名節詞」は、「t h a t」「w h e t h e r」「i f」しかありません

あとは、第08講で学習しますが、「疑問詞」と呼ばれているものが、「名節」をつくり、「名節詞」を兼ねています

「名節」は、あらたなる大きな『文。』の中で、「主役」「目的役」「補役」になります

「名節」のまとめ

種 類	意 味	働く場面
t h a t 節	～ということ	「主目補」
w h e t h e r 節	～かどうかということ	「主目補」
i f 節		「目補」
w h 節・疑問詞節	(疑問詞に応じて意味多数、第08講で詳説)	「主目補」

- ① Whether he finished it is not important .

名節主役

形補

「彼がそれを終えたかどうかということは、重要ではない。」

- ② The fact is that she has been ill .

主

名節補役（名補節）

「事実は、彼女がずっと病気だったということです。」

- ③ He asked if I wanted to go there .

主

名節目的役（名目的節）

「彼は、私がそこに行くことを希望しているかどうかということを尋ねた。」

「成節詞（名節詞）」を手がかりに、(元)『文。』のような「意味のあるまとまり」として認識し、それが「主目補」のいずれとして働いているのかを確定してください
はじめのうちは、「名節主役」とか「名節補役」の確定に苦勞すると思います

また、「名節補役（名補節）」の場合は、「主役」の概念的説明になっているので、意味をとるのが大変でしょう（「問題事項」の「言い換え」という、現代文読解の要です）

まずは、「主目補」を確定し、「文法」に忠実な「直訳」に徹してください

例えば、「The fact is that～」は「熟語」で「実は～なのです」と訳すようにいわれますが、まずは、「The fact」が「主語」で、「is」が「自動詞」で、「that～」が「名節補役（名補節）」というように、「文法・品詞」的に確定させて、「事実は～ということです」と「直訳」するのが真の理解への近道です

④「主語」「目的語」「補語」というのは、「1単語」の場合であり、「句」や「節」による場合は、「主句」「目的句」「補句」、「主節」「目的節」「補節」、総称して「主役」「目的役」「補役」と言うべきでしょう

II 「副節」

では、次は「副節」ですが、「副節」にも、「副詞3原則」があてはまります

原則Ⅰ・・・性質

①『文。』の「構成要素」である「主自他目補」には、なれない
②『文。』の「構成要素」の隙間のどこにでも置かれる（文頭・文中挿入・文末）

原則Ⅱ・・・意味

①時、②場所、③程度、④頻度、⑤目的、⑥手段、⑦理由、⑧条件、⑨譲歩、
⑩否定、⑪付帯状況、⑫結果、⑬その他様々

原則Ⅲ・・・修飾先

① 詞修飾、②形容詞修飾、③副詞修飾、④『文。』全体修飾

「副節」は「（ ）」で括り、排除して、「主節」を確定して読んでいかなければなら
ないのです（「原則Ⅰ①」）

「原則Ⅰ②」では、「（，挿入，）」に注意してください

では、多数ある「原則Ⅱ」の意味をまずは日本語で見ていきましょう

次の例文の の中には、どんなことばが入るでしょうか

「私は、私が彼女を好きになった 、彼女に告白した。」

節の意味	副 節（従属節）	主 節
時	私が彼女を好きになった <u>とき</u> 、	私は、彼女に告白した。
場所	私が彼女を好きになった <u>ところで</u> 、	私は、彼女に告白した。
理由	私が彼女を好きになった <u>ので</u> 、	私は、彼女に告白した。

日本語では、『文。』に様々な「成節語（接続助詞等）」を付けることで、『文。』を「副
節」化し、「主節」の「場面状況」を設定しています

ほかにも、「主節」を変更すれば、「条件」の「私が彼女を好きなら」、「私は、彼女に告白するでしょう。」や、「譲歩」の「私が彼女を好きになったけれども」、「私は、彼女に告白できなかった。」なども考えられます

《「場面状況」の「副節」》+《「主節」》という「構成」に着目してください

では、英文で見てください

節の意味	副 節（従属節）	主 節
時	When I liked her,	I told her love.
場所	Where I liked her,	I told her love.
理由	Because I liked her,	I told her love.
条件	If I like her,	I will tell her love.
譲歩	Though I liked her,	I couldn't told her love.

英語では、『文。』の頭に、「成節詞（副節詞）」をつけるだけなのです
「形式的」に明瞭で、一見してわかります
（「副節」を「主節」の後に置くことや「主節」の中に「挿入」することも可能です）

「s o . . . t h a t ~」の「再認識」

「程度」をあらわす「副節」も見てください
「s o . . . t h a t ~」構文というものです

I was very hungry .
副 形補語

「とてもお腹が空いた」と言っても、様々な程度があります
その程度すなわち「形補語の状況（程度）」を「t h a t 副節」で具体的詳細に伝えようとするのが、この構文なのです

I was so hungry that I couldn't walk .
副 副節（「s o」の具体的詳細）・程度

「s o」で「そんなに」といっても、「どんなに」かがわからないので、「t h a t 副節」で詳しく伝えているのです

「私は、私が歩くことができなかったほど、そんなに空腹だった」と「直訳」します
「私は、空腹だったので、歩くことができなかった」というような、「慣習訳」や「感覚訳」「意識」は、「入門者」「英語苦手組」には禁物です

「意識」で喜んでいると、いつまでたっても、「文法力」「構造把握力」「論理力」はつきません

一般では、「不自然な日本語」を嫌い、「自然な意識」を強要しているようですが、「英語の苦手な人」は「語学のカン」にあふれているわけではないのですから、「語学感覚にあふれている方」のための「特殊なやり方」で浸透するはずもありません
まずは、「徹底した文法」「徹底した構造把握」に「徹底した直訳」です

そこから、多少不自然であれ、論理的に出でくる「直訳」を納得してから、「自然な日本語」とやらの、修正すればいいのです（実際は、「記述試験」対策時です）

同じ現象に対しても、「英語」と「日本語」では、受け取り方や表現には感覚等の違いがあるのですから、無理矢理、「英文」から直接に「自然な日本語意識とやら」にもっていく必要はないというか、無理です

「文法的論理的直訳」という「中間項」をはさむべきでしょう

「辞書」や「参考書」では、「苦手な学習者」のために、できれば、「直訳」「意識」の両者を併記すべきでしょうし、そうであれば、ありがたいものですね

「英文」が読めるようになることが「目的」で、そのために、様々な「手段」を考え、採用すべきであって、「自然な日本語訳」ができるようになることが「目的」ではないはずです（世間は、なんでまあ、自然な日本語訳にこだわり押し付けてくるんでしょうか）

しかも、「自然な日本語訳」が要求されるのは、「長文読解」ができるようになったあとの、「答案作成」の段階でしょう

「1『文。』の文法的英文読解」ができない人に「自然な日本語訳」を強要してみたところで、教える側の「勝ち誇り」以外に得るものがあるのでしょうか

英文読解を語る前に、論理を指導する以上、少なくとも化学と現代文と古文の大学受験指導経験は必須なのではないでしょうか（英語一科目のみの指導はあまりに狭窄に過ぎるでしょう）

「英語が苦手な方」「初級レベルの方」は、

①まず「品詞の認識」と「品詞分解」の中で、様々な「句」「節」を判別し、②「名語句節」と「形補（語句）」に注目しながら「文役」を確定し、③どの「形容詞（語句節）」がどの「名詞」にかかっているかを確認し、④「動詞」の使用法を確認して、「文法的な」「逐語訳」に努めてください

ここで、「英文読解」の「障害物」ともいうべき「同格」というものを紹介します

Ⅲ 「同格」

「名語句同格」

«「中心名詞」が、直前直後に置かれた「名語」「名句」により説明・限定を受ける場合»をいいます

He is our hero Saigo.

↑ = 「同格」 = ↑ 「全体で補役だと考えます」
私たちの英雄（「説明部分」）「である」西郷（「中心補語」）

「同格」は「である」「の」で訳して、「中心補語」を具体的に説明しています

Nobunaga, a famous samurai, is a hero.

↑ = 「同格」 = ↑ 「全体で主役だと考えます」

「有名な武将である信長は英雄だ。」「信長は、有名な武将であるが、英雄だ。」

「である」で訳す方法と、「であるが」で挿入的に訳す方法があります
「中心名詞（主語）」の「信長」を具体的に説明しています

「名節同格」

ここで、「that 節（～という）」「whether 節（～かどうかという）」を使った、「名節同格」という説明手段を紹介します（「if 節」は使えません）
ある「名語」に、「自動詞」をはさんだ「名補節」としてではなく、«直接に、「節」による説明を加えたい場合の方法»が「名節同格」です（「第12講」参照）

The fact that she knows it is a good thing.

名語 = 同格節 名補句

「名語句」＋「同格節」全体で「主役」
「～という事実」

この枠内はマニアックなので回避してください

ここで、重要な観点は、「名節同格の由来」と位置付けの大きな視点です

「同格の t h a t」を各論的に提示しても瑣末な知識の羅列の一端にすぎません

「同格の t h a t」は①何のために②何処から来たのかという視点で整理できるかが重要なのです

「The fact is that she knows it .」 という「that名節」を「補節（補役→「第09講」参照）」とした、「補完文型」である「元の『文。』」があり（②）、この「元の『文。』」全体を「名詞化」しているのです（手段）

「that the fact is that she knows it」としなくてよいのです（簡便な手段なのです）

高度な内容を「1『文。』」で提示するために、小さな『文。』を「名詞化」し、次の大きな『文。』に「主目補」として投入するのが目的です（①）

以上のように、「現象（結果）」を「原因（由来）」「目的」「手段」等から位置づけられるような視点・思考方法を身につけてください

I have the question whether she will read my letter .
名語 = 同格節

「名句」＋「同格節」全体で「目的役」

「～かどうかという疑問」

「同格節」は、実態的には「先行する名語」を後ろから修飾するような「形容節」的な働きをしていますが、「事実」や「疑問」そのものを修飾しているわけではなく、その具体的内容説明であり（「私が知っている事実」と「私があの事実を知っているという事実」との違いで、前者は、「何を（事実）」を直接修飾しています）、また「元の『文。』」では「名補節」であることから、「名節」が付加されていると考えるべきなのでしょう（「第22講」の「形容節」参照）

「同格」になる「名語」は限られていますが、ここでは深入りしません（辞書の「従属接続詞」の「t h a t」を参照してください）

「同格」の形式的特徴は、

≪「名語句」＋「t h a t」＋「完全な『文。』」≫

≪「名語句」＋「w h e t h e r」＋「完全な『文。』」≫ です

実質的特徴は、「完全な『文。』」で「名語句」を具体的に説明していることです

「同格」の「o f」

B o f A という場合のうち、

「AというB」と訳し、「o f A」が「B」の具体的内容を説明するものです
「B」に関して「A」が具体的に補足説明しているのですが、最初に説明した「名語句同格」の場合は（言い換えという性質が強いところから）「同格」といってもいいのですが、「o f A」という形からして、明らかに「形容句」であり、「同格」とはいいづらいものではありませんが、「自立文型」や「t h a t 節同格」の簡略形と考えられます（主格の「o f」と比較検証してみると、主格の場合は「o f A」の部分が「主役」に相当し、「同格」の場合は、「o f A」の部分は「補役」で「B」の部分は「主役」に相当します）
例文をあげておきますが、「同格のo f」を辞書で一通り目を通しておいってください

t h e c i t y o f Y k o h a m a → T h e c i t y i s Y k o h a m a .
横浜という都市（横浜市） 「i n」とは違いますね

t h e f a c t o f h i s k n o w i n g i t （「第12講参照」）
彼がそれを知っているという事実
→ T h e f a c t i s t h a t h e k n o w s i t .
（これは、「t h a t h e k n o w s i t」を、「分詞」を利用して簡略的に「名詞化」したものです）

次講では、「疑問詞」が「名節」をつくる様子をみてみましょう

「ひさかたのひかりのどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」（紀友則）

少し発展的な補足をいたします

「群成句詞」と同様、「群成節詞」（「群副節詞」のみ）というものがあります

「群成節詞」「群副節詞」（「群従属接続詞」）

「成節詞」の場合も、一語の「成節詞」では表せない複雑高度な場合等は、語集団で一語の「成節詞」と同様の役割を果たさせます（論理的には、「成節句」ですね）
「群名節詞」はありませんが、「群副節詞」は多数あります
「a s f a r a s」が有名ですが、辞書で調べてみてください
これ以上品詞分解をしても有用ではないので、一語の「成節詞」として扱います
以下の「副詞系の使われ方」の表を参照し、辞書の例文を見てください
これらは、1語の「副節詞」として覚えてしまうのが得策です

副詞系の使われ方

意 味	副節詞と群副節詞		不定詞副詞的用法	分詞の副詞的用法(準副節)
①時	when, while, before after, since, till, until, once <u>as soon as</u> , <u>every time</u> <u>by the time</u> , <u>the moment</u>	as 「as 節」 の有無、 以下同様	(無)	～するとき
②場所	where		(無)	(無)
③程度	so～that, such～that	as (比較)	～するほど	(無)
④目的	(,)so that, (,)(so) that <u>in order that</u> lest, <u>for fear (that)</u> <u>in case</u>		～するために (in order to)	(無)
⑤理由	because, since <u>now that</u> , <u>seeing that</u> for (等位接続詞)	as	～して… (原因) ～するとは(判断)	～なので
⑥条件	if, unless, but, given suppose, supposing provided, providing granted, granting		～したら	もし～ならば
⑦譲歩	though, although <u>even if</u> , <u>even though</u>	as	(無)	～だけれども
⑧否定			(無)	(無)
⑨結果	, so(that)		…したその結果～	(無)
⑩付帯状況			(無)	～しながら ～して(連続)
⑪その他	as (～するにつれて) as (if) (～するように) but (～しないでは) than (～より) while (～なのに) when (～なのに) whereas (～なのに) except (～を除けば)		～なんて(感嘆) 「程度」と「判断」 の不定詞副詞的用 法は、「あとひき形 容詞」に続く副詞 系のひとつです (第19講参照)	主節と副詞節の 主語が異なる 「準副節」(独立 分詞構文)に注 意(第16講参 照)

ここで、「名詞」というものにはどんなものがあるのか考えてみましょう

I、「名詞」は「物（モノ）」をあらわす

見たり、触れることができる様々な物的な存在に名前をつけて、認識区別する（「分節する」という） 例えば、「石」・・・

II、普通の人間には見えない「モノ」や伝説上・想像上の「モノ」をあらわすこともできる

見たり、触れることができない様々な観念的なモノに名前をつけて分節する
例えば、「神」「妖精」「オーラ」「幽霊」「龍」「鬼」「麒麟」

III、ある程度見て取れる「コト」をあらわすこともできる

宇宙の中の、出来事（現象）を一言（単語）で分節することができる
例えば、「火事」「事件」「爆発」「活躍」「平和」

IV、見えない「コト」をあらわすこともできる

見たり、触れることができない様々な精神的なことに名前をつけて分節する
例えば、「愛情」「根性」「勇気」

（ここで、物的なもの（無機物と有機物）と精神的なものを区別・認識してください）

V、他の「品詞」を転用して、「名詞」化することもできる

日本語では、用言の「活用」や「接尾語（語末の変化）」で対応しています

例えば、「読む」は「動詞の終止形」ですが、「連用形」の「読み」は「名詞」として転用され、例えば、「読みが甘い」と「主語」に使えます

また、「形容詞」の「美しい」の「語幹」に接尾語「さ」をつければ、「美しさ」という「名詞」になります

英語では、「不定詞」「分詞」や「派生語」による変形が該当します

（「形容詞」happy → 「名詞」happiness）

VI、単語としてあらわせない複雑高度なことでも、『文。』全体そのものを「名詞」化することで名詞として表すこともできる

例えば、「彼は彼女を愛している。」は『文。』ですが、「彼が彼女を愛していること」は『文。』が「名詞」化されているので、『文。』の中で、「主目補」になれるのです

このように、『文。』をつくり、最後に「こと」をつければ、『文。』全体として「名詞」になれるのです

さらに、補足です

少し（かなり）難しい内容なので、はじめは読み流すか飛ばしてください

「第14講」まで読み終わったら返ってきてください（第14講末に再掲します）

「転用副節詞」

- ①「名語句」＋「同格のthat節」全体を副詞として働かせたい場合、
「名語句＋that」が「副節詞」として作用します（「群副節詞」の一種）
多くの場合、「that」が省略されますので、実質的には「名語句」が「副節詞」として働いているので、「名語句の副節語句への転用」といえます
「the instant (that)節」参照
- ②「動詞」の活用形態である「能動分詞」と「受動分詞」で、その「動詞」が「他動詞」で「that節」に従えることができる場合、「分詞＋that」が「副節詞」の働きをする場合があります（第14講の⑨の表を参照）
「that」は省略される場合がほとんどなので、「分詞」自体が「副節詞」の働きをしています
「動詞」の「活用形」たる「分詞の副節詞への転用」といえます
- ② 成句詞＋名語句＋同格that」全体が「副節詞」として働いている場合もあります
「on condition that」参照

これらは、1語の「副節詞」として覚えてしまうのが得策ですが（「群副節詞」）、ただ、以上のような成立過程を認識理解していることが理解の論理経過として肝要です

「同格のthat節」の発展的研究

以下の考え方は、「第23講」を読み終わってから検討してみてください

「同格のthat節」の発生由来としては、「In fact」というような『文。』全体を修飾する副句中の名詞の「fact」を「先行詞」にして『文。』を「名詞化（名句化）」しているのではないかと考えられます

そうすると、「同格のthat節」は「形容節」と考えられます

In fact, she knows it .

→ the fact that she knows it

ここでの「that」は「役外来形容節詞」と考えられます

第08講 「疑問詞」も「名節」をつくります！

「疑問詞」は、正確には、「疑問代名詞」「疑問形容詞」「疑問副詞」です

「名詞」「形容詞」「副詞」を意識しない、単なる「疑問詞」という呼称はやめましょう（例えば、「What time is it?」の「What」は「疑問形容詞」です）

「名節」をつくるのは、本来、「成節詞」です

本講では、《「疑問詞」が「名節」をつくる》ということで、「疑問詞」が「成節詞（名節詞）」を兼ねているということを見ていきます

すなわち、「疑問詞」兼「成節詞（名節詞）」であり、「疑問成節詞」「疑問名節詞」とでも「命名」すべきものを見ていきます（もちろん、前講でみたように、「when節」「where節」等の「疑問副詞由来の副節詞」が「副節」もつくっています）

「疑問詞」と「品詞」・「文役」

例	文	「品詞」と「文役」
Which	is better ?	「名詞」・「主語」
What	happenes ?	「名詞」・「主語」
What	did he say ?	「名詞」・「目的語」
Who	is she ?	「名詞」・「補語」
Whose	book is this ?	「形容詞」・「役外名修」
When	did he go home ?	「副詞」・「役外状況」・「時」
Where	does she live ?	「副詞」・「役外状況」・「場所」
Why	did he write it ?	「副詞」・「役外状況」・「理由」
How	did you get it ?	「副詞」・「役外状況」・「手段」

「疑問詞」のある『文。』については、「疑問文」の語順ではなく、普通の『文』と同じ語順にすると、「名節」になり、「主目補」になることができます

本書では、「疑問名節」「wh名節」と呼称します

たとえば、上の7番目の例文で、

「where she lives」とすると

「彼女がどこに住んでいるかということ」という「名節」になります

ある意味、「where」は、「どこに」と「ということ」の2回訳されているとも考えられます

「成節詞（名節詞）」の「that」や「whether」を文頭にいちいちつけることなく、「疑問副詞」に「成節詞（名節詞）」の役割も担わせているのです

すなわち、「疑問副詞」と「成節詞（名節詞）」の「兼任」なのです（「疑問名節詞」）

上記の例文を「名節」化して見ましょう

「疑問詞」と「wh名節」

例	文	日本語訳
which	is better	どちらがより良いかということ
what	happens	何が起こったかということ
what	he said	彼が何を言ったかということ
who	she is	彼女が誰であるかということ
whose	book this is	これが誰の本であるかということ
when	he went home	いつ彼が家に帰ったかということ
where	she lives	どこに彼女が住んでいるかということ
why	he wrote it	なぜ彼がそれを書いたかということ
how	you got it	どうやってあなたがそれを手に入れたかということ

《「疑問代名詞」＋「不完全な『文。』」》《「疑問副詞」＋「完全な『文。』」》という点を確認・認識してください（「疑問代名詞」自体が、「文役」となっています）

「関係代名詞」の「what」という考え方は不要、「wh名節」にすぎない

「what he said」は「彼が言ったこと」と「意識」されています
また、この「what」は、「関係代名詞」だと一般にいられています

「the thing that he said」と同内容だということです

「the thing that = what」という「眉唾公式」まで用意されています（「先行詞」のない「関係代名詞」だなんて、何を血迷っているのでしょうか）

確かに、「the thing that he said」の「that」は、「the thing」という「先行詞」があるので「関係代名詞」でしょう

しかし、「what he said」には、「先行詞」は無く、上記の表の他の「疑問詞節」は「疑問詞」だといいながら、「what he said」の「what」を殊更に「先行詞のない関係代名詞」だという必要があるのでしょうか
「意味的同内容」であるという現象面だけを捉えて異種のものを同一平面状で扱うという勇み足で、論理的統一性をみだすようなことをする必要はないでしょう

本書では、「w h a t」を「疑問名節詞」と考えます

「彼が何を言ったかということ」(直訳)から「彼が言ったこと」(意識)へと「意識」しているだけのことにすぎないのに、文法的問題を無駄に複雑曖昧な解決へと持ち込むことなく、単純明快に、できる限り「文法的根拠」をもとに「直訳」をし、それから「意識」へ「変換」という「段階」を確実に踏むようにすればよいのです

「w h a t h e s a i d」

「疑問名節」であって、「関係代名詞」によるという曖昧なものではない

「w h a t h a p p e n s」というのも同様に、「何が起こっているのかということ(直訳)」「起こっていること(意識)」という「2語」の「疑問名節」です

「w h a t h a p p e n s」

2語でできている、「疑問名節」である

それから、「w h a t I a m」を「現在の私」と訳すのは、なぜでしょうか

「I a m ～」は、現在形なので「(今)」をつけて「私は(今)～です」と訳します

「W h a t a m I ?」は、「私は(今)何なのでしょうかと訳します
「名節」にした「w h a t I a m」は、「私が(今)何であるかということ」と「直訳」し、それを「現在の私」と意識されているのです

「w h a t I a m」

単なる「疑問名節」であり、「意識」に惑わされ振り回されるな

ただの、「熟語丸暗記」よりも、多少「論理分析」してみてもいかがでしょうか
それでは、これに類する主な「疑問名節」と「意識」をあげてみましょう

「what」の「疑問名節」と「意訳」

例	文	意訳
what	Taro was	過去のタロー
what	he was ten years ago	10年前の彼
what	she used to be	かつてそうであった彼女
what	I have been	さっきまでの私
what	they will be	将来の彼ら
what	Japan should be in the future	未来におけるあるべき日本

「疑問名節」であることを認識して、「文法的直訳」を検討してみてください

「wh節」と「成節詞」

「wh節」は「名節」ですから、「主目補」になれます

ここで、少し注目してもらいたいのが、「後属役」や「目的役」です
 (「役」とは、「他動詞」や「成句詞」の「目的」になっている「語・句・節」の総称です)
 「wh節」は、「成句詞」の「後属節」や「他動詞」の「目的節」には一般的になる
 ことができます

ただ、「if節」は「成句詞」の「後属節」にはなれません

また、「that節」も、一部例外を除いて、原則的には、「成句詞」の「後属節」
 にはなれません

○ 「成句詞」 + 「wh節」

× 「成句詞」 + 「if節」

▲ 「成句詞」 + 「that節」

例外の「成句詞」 「except」「but」「besides」「in」等

これは、使用者の習慣であって、論理ではないので、覚えるしかありません

「w h 句」とは

「what to do」「when to go」「how to do」等は、見慣れているでしょう

これらは、「wh名節」の変形であり、「主語」の表記が不要な場合で、「不定詞」を使った「軽量型」の表現です

「wh準名節」「wh名句」と呼称されるようなものです
機能的には、「wh名節」と同じで、「主目補」になります

「wh名節」

what I (sould) do (私が何をすべきかということ)

「wh準名節」「wh名句」

→ what to do (何をしたらよいかということ)

(「第11講」参照)

「疑問詞」が「副節」をつくる

本講では、「疑問詞（名形副）」が「名節」をつくと銘打ってまいりましたが、「疑問詞（副）」が「副節」をつくる場合を補足させていただきます

おなじみの「when～」以外の、他の有名な例文をあげます

Where there is a will, there is a way.

「疑問副詞」の「when」「where」の他には「疑問詞」が「副節」をつくる場合は限られています

また、「ever」を語尾につけることにより、「譲歩」等の意味で「疑問詞」が「副節」をつくる場合を拡張させています（「複合関係詞」といわれているものです）
これらの点は、細かい事項なので、別巻で詳述する予定です

最後に、ちょっと、今さらながら確認ですが、

「Whose book is this?」と

「Whose is this book?」との「文法的違い」は大丈夫ですよ

本講までにより、「品詞」の3形態である、「語」「句」「節」が出そろったので、次講では、より大きな視点を持って、「品詞」と「文役」についてまとめましょう

第09講 大きな「品詞」と「文役」のまとめ

第06講と第07講で、「句」と「節」の学習をし、「詞」の形態が出そろいましたので、本講では、「品詞」と「語句節」、それらと「文役」との関係性をまとめてみます

既習のように、「句」は「成句詞」によって「形容句」「副句」がつくられ、「節」は「成節詞（名節詞と副節詞）」によって「名節」「副節」がつくられるのですから、「成句詞」や「成節詞」は、新たに大きな「名詞」「形容詞」「副詞」（略して「名形副」）をつくるための「品詞」であることがわかります（「品詞」の拡大と「手段詞」）

すなわち、「成句詞」による「形容句」「副句」や「成節詞」による「名節」「副節」は生来的な「名形副」ではなく、したがって、「成句詞」や「成節詞」はつくられた「名形副」のための「手段的な品詞」なのです（本書では、「手段詞」と命名します）

その他の「手段詞」としては、「形容節」をつくる「構成来形容節詞（関係代名詞）」と「役外来形容節詞（関係副詞）」があります（「第10講」「第11講」参照）

また、性質的には多少異なりますが、「推量」的に文意を整える「助動詞」や、『文。』「句」「語」の関係を整える「等位接続詞」を「手段詞」に含めて考え得ます

ここで、確認しておきたいのは、『文。』というものは、①「自動詞」「他動詞」により「名詞」「形容詞」が操られ、②「副詞」が彩りをそえるということと、③本来的な「名形副」の「単語」である「名語」「形容語」「副語」以外に、つくられた大きな「名形副」（「句」「節」）でも構成されているということです

『文。』を構成する「品詞」には、「名詞」「自動詞」「他動詞」の他に、「名詞」の「状態」を示す「形容詞」があり、「場面状況」を設定する「副詞」があります
そして、「名形副」のそれぞれが、「詞」の形態として、「語」「句」「節」を備えており、以下の表のように9個の「品詞」の種類・形態が存することになります

次に、それらが『文。』中でどのように働いているかが問題となります（「文役」の観点）

「品詞」と「語句節」		「詞」の形態		
		（単）語	句	節
品詞 の種類	名詞	名語	名句	名節
	形容詞	形容語	形容句	形容節
	副詞	副語	副句	副節

「品詞」のまとめ

総 称	品詞称	各 称	役 割
「品詞」	「名 詞」	「名 語」	「主目補」になる
		「名 句」	
		「名 節」	
	「形容詞」	「形容語」	①「補役」になる
		「形容句」	②「名詞修飾形容詞」になる
		「形容節」	「名詞修飾形容詞」になる
	「副 詞」	「副 語」	「場面状況」を 設定する 「役外状況族」
		「副 句」	
		「副 節」	

「手段詞」のまとめ

「手段詞」	役 割	具体的英単語例
「成句詞」	「名語」「名句」「名節」を後属させて、「形容句」「副句」をつくる	i n , a t
「成節詞」	『文。』まるごとを「名節」「副節」にしてしまう	t h a t , b e c a u s e
「構成来形容節詞」 (「関係代名詞」)	『文。』中の「構成要素の名詞」に注目し、『文。』を「形容詞」化し、さらに「名句」化する	t h a t , w h i c h
「役外来形容節詞」 (「関係副詞」)	『文。』中の「副句」の「後属役名詞」に注目し、『文。』を「形容詞」化し、さらに「名句」化する	w h e n , w h e r e
「助動詞」	『文。』の伝えるべき内容に、断定を避け、推量的変化を与える 「役外推量族」	c a n , m a y
「等位接続詞」	『文。』と『文。』をつなぐ 「節」と「節」をつなぐ 「句」と「句」をつなぐ 「単語」と「単語」をつなぐ	a n d , b u t

「手段詞」に対して、「名詞・形容詞・自動詞・他動詞（名形自他）」を「構成詞」と呼ぶべきでしょう

「文役」の確認

『文。』中における、「名詞」「形容詞」の「役割」の総称を「文役」といい、具体的な役割として、「主役」「目的役」「補役」の3種があり（「役称」）、そこで、「語句節」の3種がそれぞれ働くので、9種類の「役割名」が存在します（「各称」）

『文。』中で具体的に活躍している「名詞」「形容詞」とからめた呼称として11の「構成称」がありまして、「主役」と「目的役」は「名詞」しかないので「名詞」とのからみしかありませんが、「補役」の場合は「名詞」と「形容詞」がなれますので、「名詞」とのからみからくる呼称と、「形容詞」とのからみからくる呼称の2種があります（「形容節」が「補役」になることはないので「形容補節」という呼称はありません）

「文役」のまとめ

総 称	役 称	各 称	構成称
「文役」	「主 役」	「主 語」	「名主語」
		「主 句」	「名主句」
		「主（役）節」	「名主（役）節」
	「目的役」	「目的語」	「名目的語」
		「目的句」	「名目的句」
		「目的節」	「名目的節」
	「補 役」	「補 語」	「名補語」「形容補語」
		「補 句」	「名補句」「形容補句」
		「補 節」	「名補節」「—」

一般に、狭小矮小的に「主語」「目的語」「補語」と言われていますが、「詞」として「語」「句」「節」がありますので、上位概念として、「主役」「目的役」「補役」と呼びます
上記の表中で、「主役になる節」という意味の「主（役）節」に「（役）」が入るのは、『文。』の構造上、「副節（従属節）」に対して本体の方の「節」を「主節」といいますので、それとの区別のためです（本書では、「副節」に対して「本節」といいたいところです）

また、「形容節」は先行する「名詞」（「先行詞」）を修飾するだけで（「形容節詞（関係代名詞・関係副詞）」、「第22・23講」参照）、「補役」になることはないので、「形容補節」という「構成称」はありませんので、表中では、「—」と表示しました

「補役」になる「節」は「名節」しかありません（ここで展開的な注意ですが、「名節」が「補役」となる場合は、概念的なものから具体的なものまでの高度な「内容説明」となりうることに留意してください（「言い換え」）（現代文読解の要諦です））

『「品詞⇔文役」確定表』

『詞役表』

品 詞	内 容	なれる「文役」
名 詞	「もの」や「こと」をあらわす	「主役」「目的役」「補役」
自立動詞	「主役」自体の単独の動作をあらわし、「補役」を必要としない「自動詞」	「自立文型」の「自動詞」
補完動詞	「主役」の「職業・地位・内容・概念・観念(名補)」や「状態・性質(形補)」を『文。』として説明するにあたり、「補役」と「主役」を結びつける「自動詞」	「補完文型」の「自動詞」
関渉動詞	「主役」の動作のうち、他者を巻き込み、「関与・干渉」をあらわす「他動詞」	「関渉文型」の「他動詞」
形容詞	①「中心主語」(「中心目的語」の場合もある→第21講参照)となる「名詞」の「状態・性質」を説明する	① 「補役」
	②その他「名語」一般を「修飾」する	②「名詞修飾形容詞」 役外修飾族
副 詞	場面状況を設定し、「動・形・副・文」を修飾する	役外状況族

『役詞表』『逆表』

文 役	内 容	なれる「品詞」
主 役	『文。』中の動作・状態の中心となる主体	「名詞」
目的役	「関渉動詞」の「主役」の動作の対象物(客体)	「名詞」
補 役	「主役・目的役」の①「職業・地位・内容・概念・観念」や、②「状態・性質」をあらわす	①「名詞」 ② 形 容詞

第06講の「句」と第07講の「節」をよく認識・理解し、「句・節」が大きな「品詞」になり大きな「文役」となっていくことを完全に把握してください

補足です

「成句詞」の「後属役」のまとめ

「成句詞（前置詞）」の 「後属役」	各 称	なれる語句節
	「後属語」	「名語」
	「後属句」	「名句」
	「後属節」	「名節」

さらに、補足です

「倒置」について

「倒置」とは、作文者が、強調したい「語句節」がある場合、その強調したい「語句節」の位置に変化をもたらすことです

主に、「目的役」「補役」「副詞」を「文頭」に持ち出すことをいいます

この場合の多くは、その影響から、「主役」と「動詞」の位置にも「倒置」が生じます（「主語＋動詞＋倒置語句節」ではなく「倒置語句節＋動詞＋主語」と逆転します）
全体的に、通常の語順に変化が生じるのです

ここまでの学習で、『文。』の「構成要素」は「語句節」からなる「名詞」「形容詞」と「自動詞」「他動詞」ということであり、これらを「名形自他」と略し、「構成詞」と呼称すべきことに共感いただけましたでしょうか

本書では、「成句詞」による新たな「形容詞」「副詞」の創設や、「成節詞」に「形容節詞」や「動詞の活用（第10講以下参照）」により、『文。』が「名詞化」「形容詞化」「副詞化」していくことを略して、

「名化」「形容化」「形化」「副化」「形副化」「名副化」「名形副化」等と表現しますので、臨機応変に対応してください

次講以降では、話を変えて、着眼を大きくして、「動詞」の「活用」と「名形副化（物態況化）」ということを考えていきましょう

本稿旧版では、次講と次々講で、「節つながり」ということで、「形容節（関係代名詞と関係副詞と言われているもの）」についてみていましたが、もし「形容節」の講で挫折する可能性を考えると、構造や構成要素について全て終わらせたあとで、じっくり「形容節」と「仮定法」に取り組んでいただこうと思い、ほぼ最後尾に移しました
形容節に興味がある方は、先に第22・23講を読んでもかまいませんよ